貝塚市埋蔵文化財調査報告　第38集

貝塚市遺跡群発掘調査概要18

1996. 3. 29

貝 塚 市 教 育 委 員 会

はじめに

わが貝塚市は、北に波静かな大阪湾、南に緑豊かな和泉山脈とに接し、恵まれた自然環境を有する地域であります。その自然環境の良さから、市内各地には私たちの先人が残した数多くの遺跡が存在します。

これらは貴重な歴史的・文化的遺産であり、後世に伝えるために保護を講じることは、現在に生きる私たちに与えられた義務であります。しかし、近年の都市化の波による各種開発はこれらを破壊の危機にさらしています。

今回の調査もこうした開発行為に伴う事前調査ではありますが、幾多の成果を得ることができましたので、ここに平成7年度中に実施しました市内埋蔵文化財緊急発掘調査結果の一部を報告いたします。本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力をいただき、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

平成8年3月29日

貝塚市教育委員会
教育長　福　井　昱　彦

例　　言

1．本書は、貝塚市教育委員会が平成７年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域における埋蔵文化財緊急発掘調査のうち、貝塚寺内町遺跡、沢城跡の発掘調査にかかる結果の概要報告である。

2．発掘調査は、貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員前川浩一、三浦　基、上野裕子が担当し、平成７年６月15日より調査を実施し、平成８年３月29日に終了した。

　また、現地・内業調査および本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施した。

　　大西隆子　　清水久子　　古家奈佳　　南　明美

3．本書作成にかかる執筆、編集は前川が担当した。

4．遺物整理にあたっては森村健一氏、嶋谷和彦氏のご教示を得た。記して感謝の意を表す。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

Ⅰ　貝塚寺内町遺跡の調査
1．位置と環境 …… 1
2．調査の概要 …… 2
3．出土遺物 …… 3
4．まとめ …… 4

Ⅱ　貝塚寺内町遺跡の調査
1．位置と環境 …… 6
2．調査の概要 …… 6
3．検出遺構 …… 7
4．出土遺物 …… 7
5．まとめ …… 10

Ⅲ　沢城跡の調査
1．位置と環境 …… 11
2．調査の概要 …… 11
3．検出遺構 …… 12
4．出土遺物 …… 13
5．まとめ …… 14

図　版　目　次

図版１　貝塚寺内町遺跡（Ⅰ）
１、第１区全景
２、第２区全景

図版２　貝塚寺内町遺跡（Ⅰ）
１、第１区土層断面
２、第２区土層断面

図版３　貝塚寺内町遺跡（Ⅱ）
１、調査区全景
２、同　　上

図版４　沢城跡
１、遺構検出状況
２、同　　上

図版５　沢城跡
１、遺構検出状況
２、調査区完掘状況

図版６　沢城跡
１、調査区土層断面
２、ＳＤ－１土層断面

挿　図　目　次

図１　貝塚市遺跡分布図（部分）

図２　調査地位置図

図３　調査区配置図

図４　第１区、第２区出土遺物

図５　調査区、遺構配置図

図６　ＳＫ－１、ＳＸ－１出土遺物

図７　ＳＸ－２出土遺物

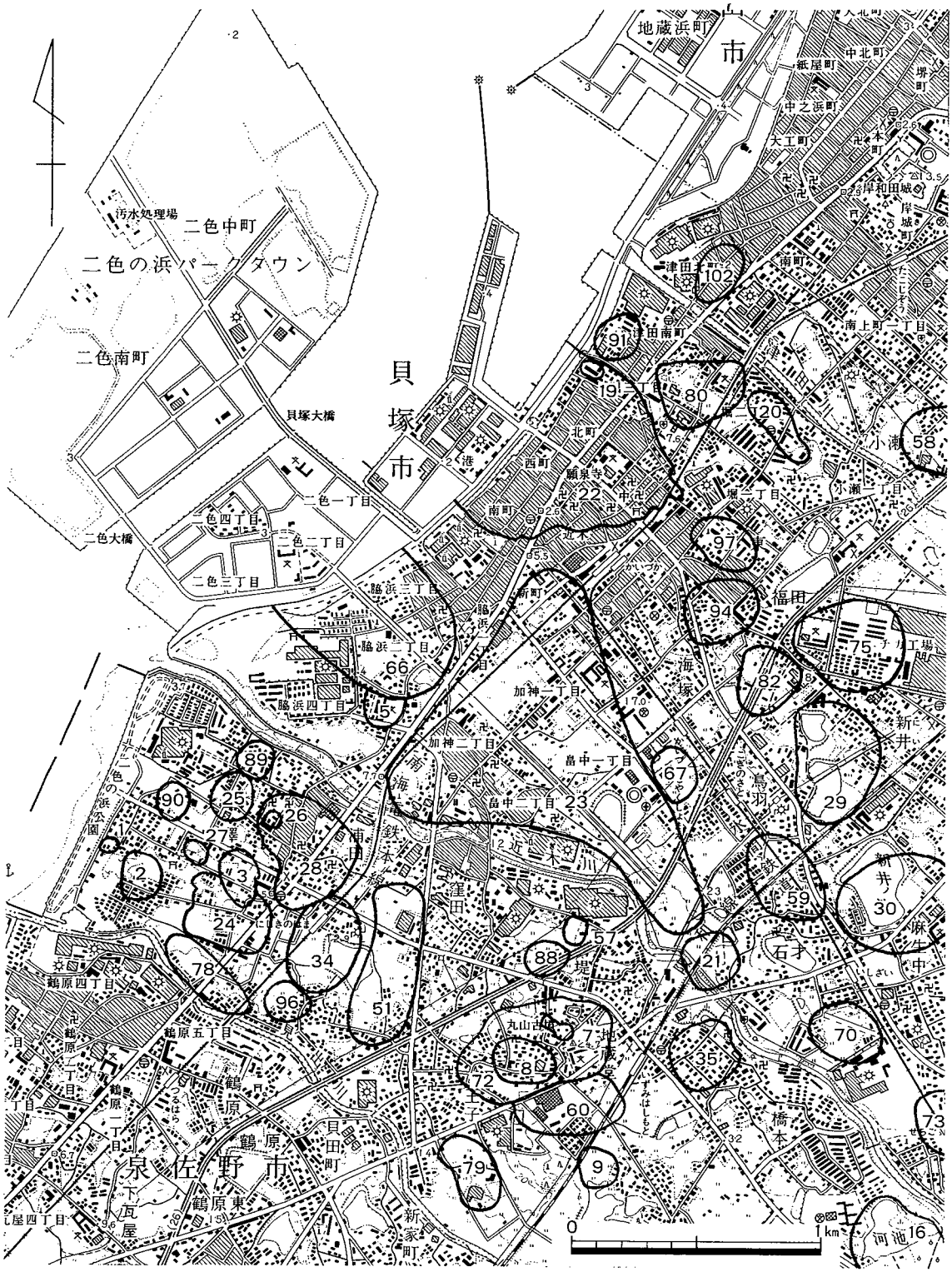
図８　調査地位置図

図９　調査区、遺構配置図

図10　ＳＤ－１出土遺物

図11　ＳＤ－１出土遺物

図12　第２層出土遺物



1.沢新出遺跡　2.沢海岸遺跡　3.沢遺跡　5.長楽寺跡　7.丸山古墳　8.地蔵堂遺跡　9.下新出遺跡　16.河池遺跡　19.泉州麻生塩壺出土地　20.堀遺跡　21.橋本遺跡　22.貝塚寺内町遺跡　23.加治・神前・畠中遺跡　24.明楽寺跡　25.沢共同墓地遺跡　26.沢西出遺跡　27.沢海岸北遺跡　28.沢城跡　29.新井・鳥羽遺跡　30.新井ノ池遺跡　34.澱治遺跡　35.積善寺城跡　51.窪田遺跡・窪田廃寺　57.堤遺跡　58.小瀬五所山遺跡　59.石才遺跡　60.王子遺跡　66.脇浜遺跡　67.今池遺跡　70.石才南遺跡　72.地蔵遺跡　73.名越西遺跡　75.新井・鳥羽北遺跡　78.沢西遺跡　79.王子西遺跡　80.津田遺跡　82.福田遺跡　88.堤三宅遺跡　89.沢新開遺跡　90.沢タナジリ遺跡　91.堀新遺跡　94.堀秋毛遺跡　96.沢老ノ塚遺跡　97.東遺跡　102.津田北遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図(部分)

Ⅰ　貝塚寺内町遺跡の調査

1．位置と環境（図２）

発掘調査を実施したのは貝塚寺内町遺跡の一角である。

貝塚寺内町遺跡は貝塚市北部の大阪湾に面し、砂堆部から中位段丘端部、海抜２～９ｍを測る地点に位置する。16世紀中頃に石山本願寺下の寺内としてとりたてられたと伝え、以後、寺内町として栄え、天正13（1585）年には本願寺御堂がおかれた。慶安元（1648）年の銘を持つ絵図によると、寺内町の周囲には掘と土塁が巡らされ防備の施された城塁的都市であったことが窺える。

周辺の遺跡としては、東には中世から近世にかけての集落跡、窯跡と考えられる津田遺跡、近世の集落跡である東遺跡、中世の集落跡である堀秋毛遺跡、南には古墳時代以降の集落跡である加治・神前・畠中遺跡、縄文時代以降の散布地、集落跡である脇浜遺跡等が存在し、南側の遺跡を除くと周辺は中世以降に開けた地域である。

今回の調査地は遺跡マーク地のほぼ中央部にあたり、貝塚市西町644―2ある。砂堆部分に位置し、周辺には17世紀から18世紀にかけての建築と見られる民家等が存在する、古い町並みが残るとされる一角である。

2．調査の概要（図３）

建設計画にもとづき、調査対象地内に1.5×５ｍの調査区を２ヶ所設定し、北側を第１区、南

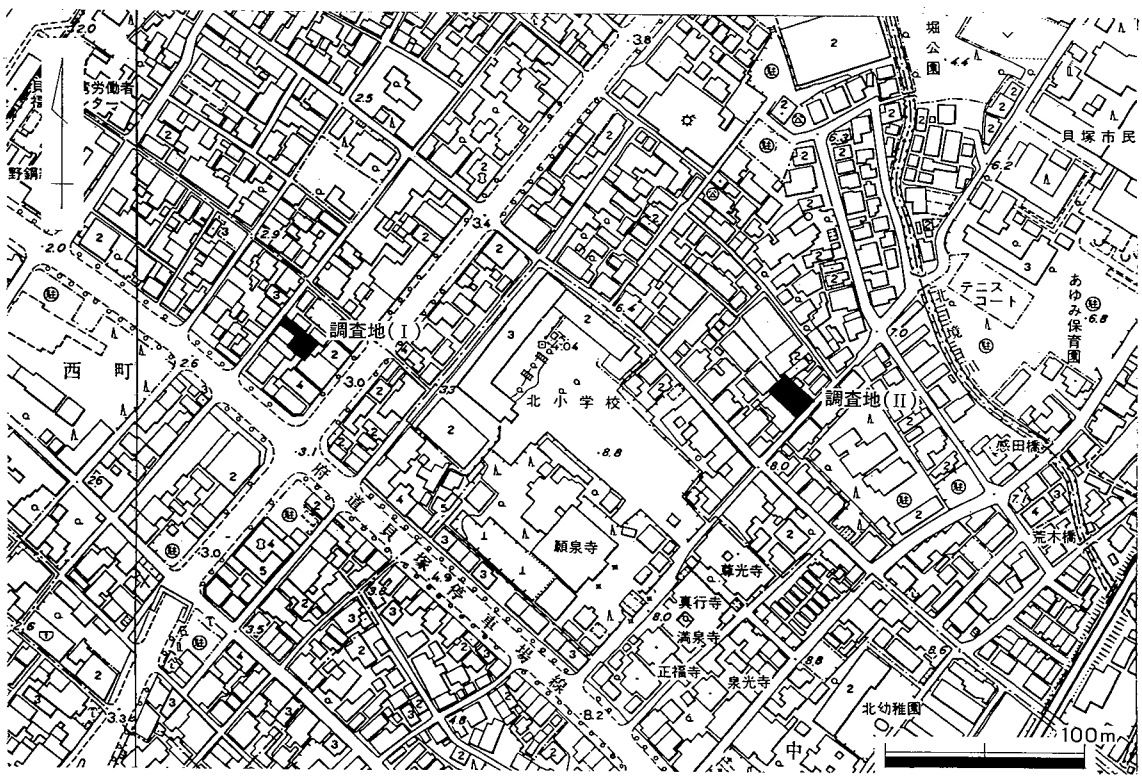


図２　調査地位置図

側を第２区として発掘調査を実施した。

調査地内の層序は、第１区と第２区では異なる。第１区では上から順に、淡黄色細砂（第１層、層厚約20cm）、暗茶黄色土（第２層、層厚約20cm）、淡灰色細砂（第３層、層厚約30cm）、淡黄色細砂（第４層、層厚約20cm）、淡黄茶色土（第５層、層厚約40cm）、暗灰色細砂（第６層、層厚約10cm）、暗灰色細砂焼土含む（第７層、層厚約20cm、茶灰色細砂（第８層、層厚50cm以上）となる。第２区では上から順に、淡黄色細砂（第１層、層厚約50cm）、灰色細砂（第２層、層厚約10cm）、暗灰色細砂（第４層、層厚約20cm）、暗灰色細砂黄色粘土混り（第５層、層厚約20cm）、暗灰色細砂炭混り（第６層、層厚約10cm）、暗灰色細砂（第７層、層厚約10cm）、茶灰色細砂（第９層、層厚約30cm）、茶灰色土（第10層、層厚30cm以上）となる。

第１区、第２区共に、掘削深度が危険な状況となったため、これ以上の掘削は中止した。したがって、地山の確認には至っていない。また、調査地周辺は、遺跡の状況が明確ではなかったので、調査の目的は遺物包含層の確認を中心とし、遺構の検出については断面観察のみとなってい

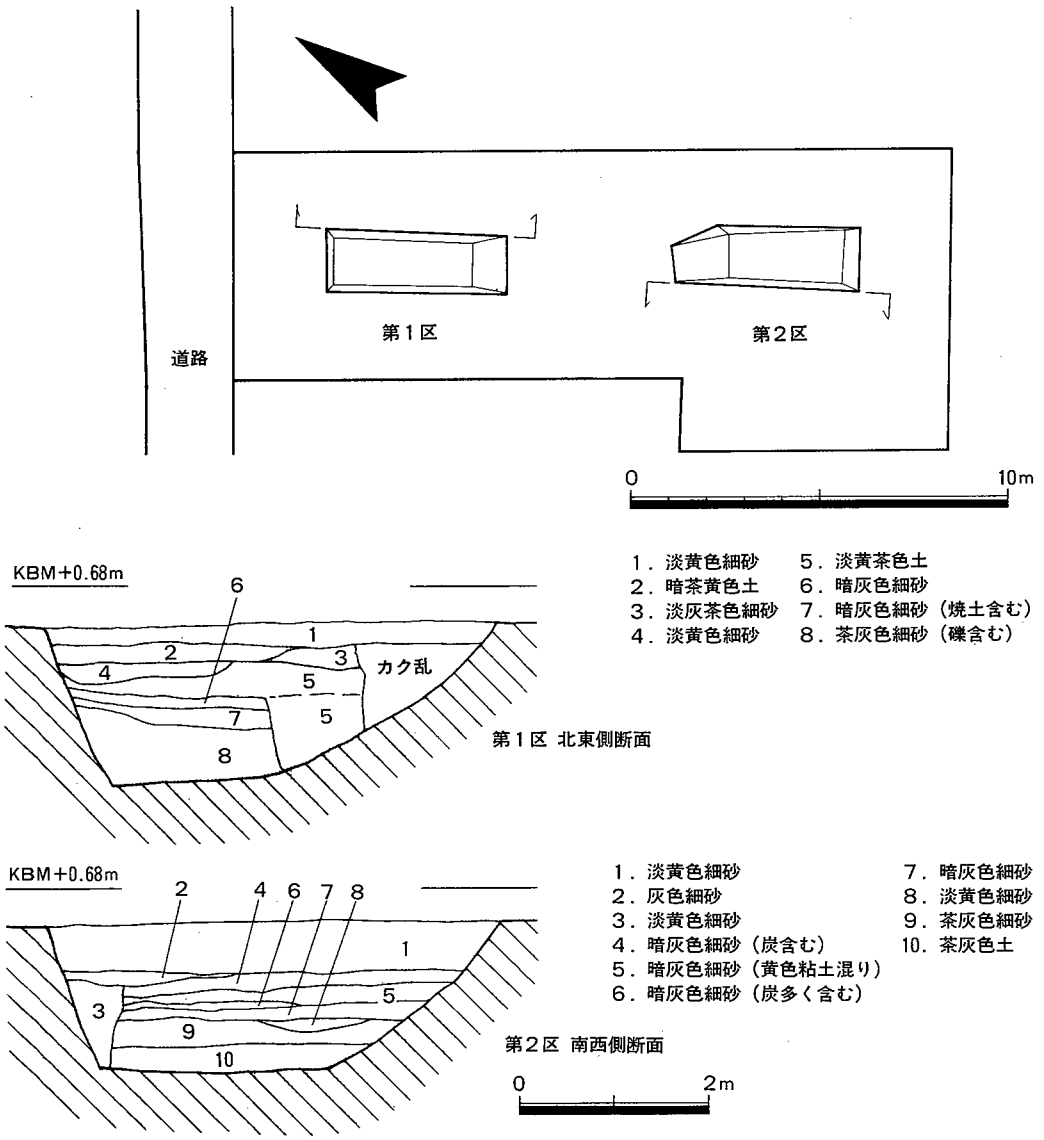


図３　調査区配置図

る。

層序から見た状況は、第１区では第１層から第３層にかけて、第２区では第１層が既設建物にかかる造成と見られ、18世紀頃以降、造成が繰返りされたことが読取れる。また、第１区では第６層上面、第２区では第４層上面に接するよう、柱礎石に利用されたと思われる石を確認し、第１区第５層、第２区第３層、第８層は遺構と見られるので、両調査区共に数面の生活面が存在することが読取れる。

３．出土遺物（図４）

調査では近世後半頃の陶磁器等が出土した。量的には多くないが、興味深いものも出土しており、今までには無かった成果が得られた。

以下、各調査区毎に概要を示す。

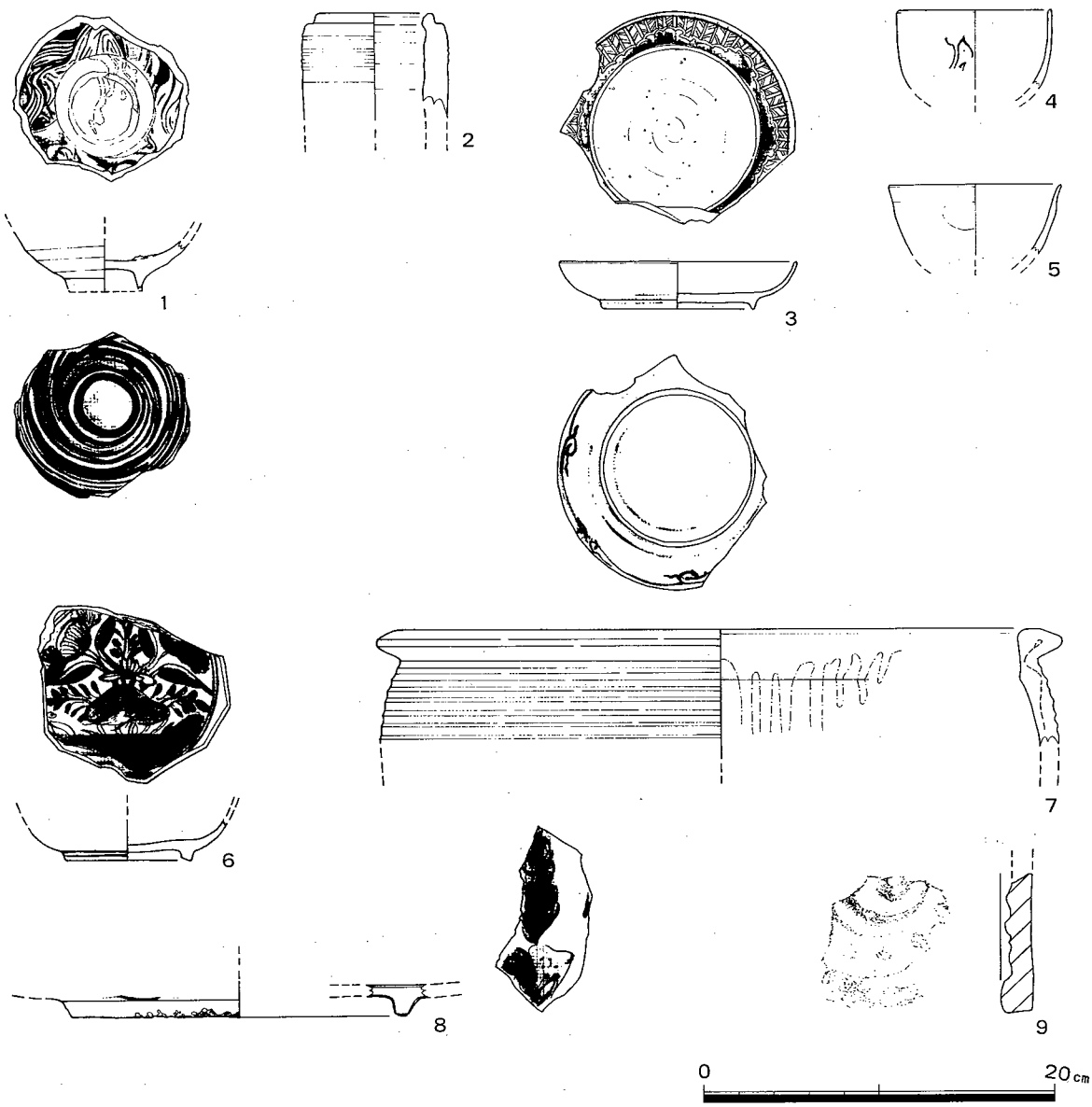


図４　第１区、第２区出土遺物

第１区出土遺物

１、２は第７層出土である。１は陶器碗である。見込みに重ね焼のための高台が付着する。２は焼塩壺である。口径約6.4cmを測り、口縁部の立上りは小さく弱い。破片であるため銘等は不明。

３は第５層出土の肥前系染付皿である。復元口径約13.4cmを測る。

第２区出土遺物

４は第９層出土の肥前系染付碗である。復元口径約8.6cmを測る。

５は第３層出土の肥前系染付碗である。復元口径約9.7cmを測る。

６、７は第２層出土である。

６は青花である。見込みに蓮池文を入れる。高台はケズリ出しであり、高台内、高台外にはケズリ痕を有す。高台径７cmを測る。

７は陶器甕である。

８は残土採取の漳州窯系青花盤である。見込みには葉状の文様が見られ、畳付には砂が付着する。復元高台径19cmを測る。

９は第１層出土軒丸瓦片である。

４．まとめ

今回の調査は制約の多い中でのものであったが、貝塚寺内町の歴史を考える上で、貴重な成果が得られたものと思われる。

以下、要点毎にまとめる。

時間の関係から層位的、面的に遺構を精査することはできなかったが、断面観察の結果では本調査地内に復数の生活面が存在することを確認し、整地を繰返して現在の地表面を形作っていることが判明した。

整地の原因としては、土層中に多量の炭等を含む部分が存在し、その量から火災によるものと推定できる。火災の規模については、本調査のみでは判断できないが、両調査共に炭等を確認したため、少なくとも本調査が全焼した可能性は高いと推定できる。

次に、遺物包含層が非常に厚く堆積することが挙げられる。危険が伴う深度まで掘削したにもかかわらず、所謂地山を確認することができなかった。

調査地が砂堆上に位置し、寺内中心部である段丘上の願泉寺周辺からは４ｍ以上も低いため、地表面のレベルをより整合させることを目的として、整地を繰返したとも考えられる。

しかし、同じ砂堆上であっても、他地点の調査では、深い所でも現地表下約１ｍ程度において地山を確認しており、本調査地が特に地山面が深く、遺物包含層が厚いといえる。

青山賢信氏による推定では、本調査地を含む一帯が、寺内成立前の原集落とされている。今回確認した土層は、時代的に寺内成立以前とは整合しないが、青山氏の推定が正しい場合、厚い遺物包含層は、本調査地の歴史の古さを示している可能性が高い。

火災、遺物包含層の厚さについては、これ以上の資料を持たないため、今後の課題としたい。

遺物については、青花２点の出土が挙げられる。寺内町の年代からいえば、青花が出土してもおかしくないはずだが、従前の調査では全く認められず、今回が初の報告例となった。今回の出土によって、貝塚寺内町にも、景徳鎮、漳州窯系のどちらの製品も持ち込まれていることが明らかとなった。

ただし、１点は残土からの採取品であり、２点共に後世の土層からの出土であって、これらの土層に含まれるまでの経緯については推定の域を出ない。それぞれの製品年代に合った頃に持ち込まれ、伝世した後に廃棄されたものか、後に持ち込まれ廃棄されたものか、16世紀から17世紀代の遺構が周辺に存在し、後に削平を受けたために後世の土層に含まれたものか、等考えられるが、断定できる資料はない。

ただ、両資料共に破れ口は鋭く、器面もそれほど荒れていないようであり、16世紀～17世紀代の遺構を後世に削平したと考えた方が自然であると思われる。

〔参考文献〕

貝塚市教育委員会『貝塚寺内町―町並調査報告書―』1987　図版３
有田町『中国古陶磁への誘い』1993

Ⅱ　貝塚寺内町遺跡の調査

1．位置と環境（図２）

今回の調査地は遺跡マーク地の北東部にあたり、貝塚市北町13―5、6である。段丘上に位置し、海抜7.5ｍを測る。

2．調査の概要（図５）

建設計画にもとづき、調査対象地内南西部に1.5×10ｍの調査区を設定して発掘調査を実施した。

調査地における基本層序は、上から順に淡褐色土（第１層、層厚約10㎝）、淡黄色粘土礫混り（第２層、層厚約10㎝）、淡黄色、灰色粘土、礫混り（第３層、層厚約10㎝）が堆積し、その下

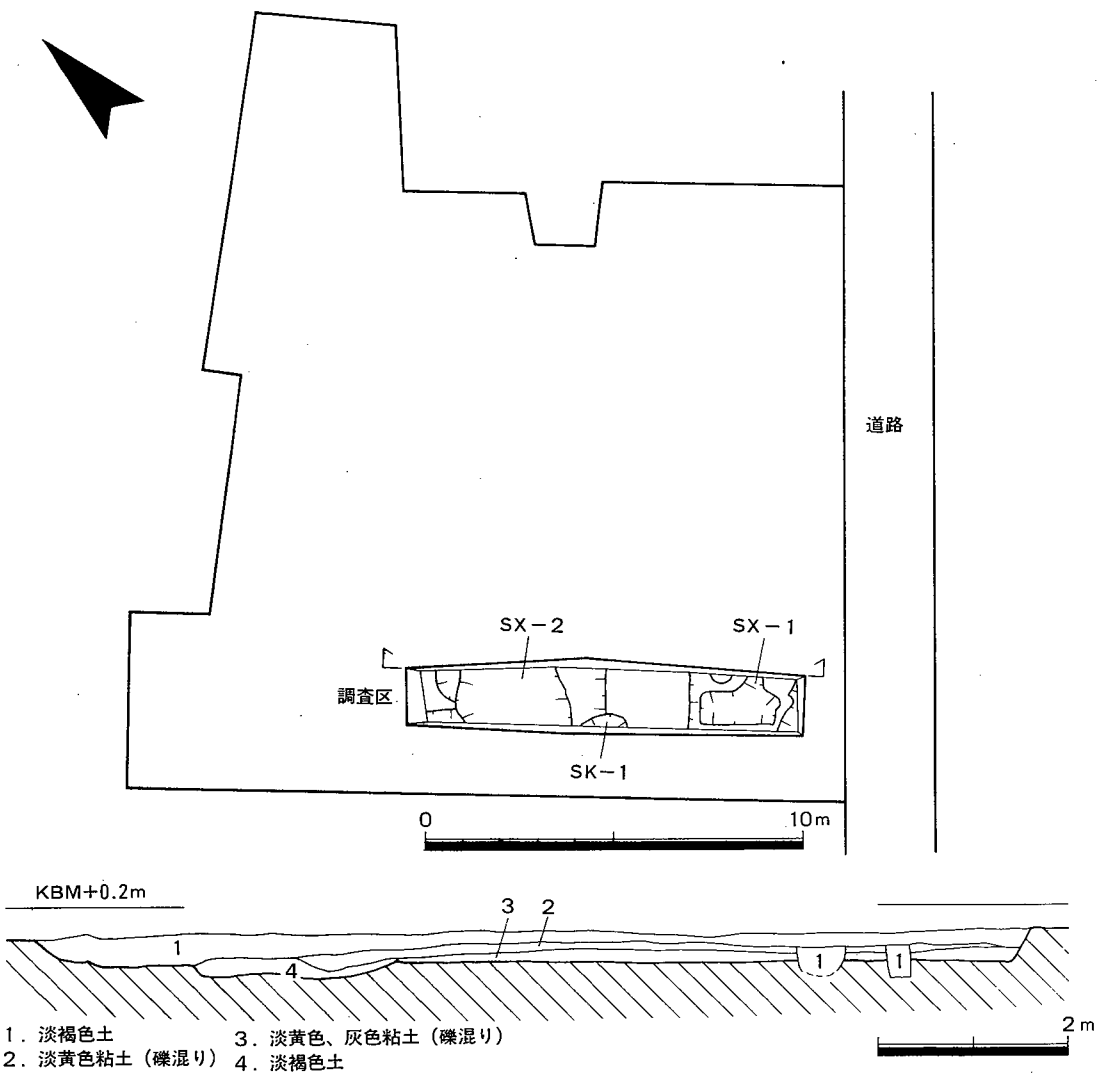


図５　調査区、遺構配置図

が暗黄色礫となる。第１層は既設建物にかかる現代土であり、第２層、第３層は非常に締まった土層であり、幕末頃までの整地層と見られる。

調査では、第３層上面にて多数の遺構を検出したため、第２層の掘削にて終了し、第３層上面の遺構精査に入った。なお、第３層については、遺構精査後、部分的に掘削し、厚さ等を確認したのみであり、その下の地山面での遺構については不明である。

３．検出遺構（図５）

調査では第３層上面のほぼ全面にて遺構を検出した。調査区のほぼ中央部分において、調査地南側の現道路と並行するように、第３層が固く締まった部分が存在し、その両側に遺構が位置しており、旧街路部分を掘削したように見えるが、トレンチ調査によるため、確証はない。

以下、主なものについてをその概要を示す。

ＳＫ－１

本遺構は調査区のほぼ中央にて検出した土坑である。検出長約1.2ｍ、幅約0.3ｍ、深さ約10㎝を測る。埋土は淡灰黄色土である。遺物は羽釜、土鍋が出土した。

ＳＸ－１

本遺構は調査区南部にて検出したゴミ穴である。長さ約２ｍ、幅0.9～1.3ｍ、深さ約15㎝を測る。埋土は第１層であり、江戸時代の陶磁器等が多数出土するものの、レンガ等を含んでおり近代以降に掘られたゴミ穴である。

ＳＸ－２

本遺構は調査区北部にて検出した性格不明遺構である。検出長1.4ｍ、幅2.9ｍ、深さ約20㎝を測る。埋土は淡灰黄色土である。本遺構の北西部の底には甕が埋設されており、その上部等で多数の陶磁器が出土した。

４．出土遺物（図６、７）

調査では近世末前後の陶磁器等が出土した。遺物包含層が薄く、遺構も浅いため、調査面積の割には出土量は多くない。

以下、遺構毎にその概要を示す。

ＳＫ－１

10は土師質羽釜である。内面はケズリ後ナデ、体部外面はケズリを施す。

11は陶器土鍋である。復元口径約20㎝を測る。黒褐色の釉がかかる。

ＳＸ－１

12、13は肥前系染付碗である。12は見込みに山の文様を入れ、底部に焼継ぎ痕がある。13は外面に印判が入る。復元口径約10㎝を測る。

14は肥前系陶胎染付碗である。

15は肥前系青磁染付碗である。内面に圏線を入れ、外面には厚く青磁がかかる。

16は肥前系陶器碗である。見込みには菊花文が入り、高台内から体部下部までは露胎である。

17～20は陶器である。17は土鍋である。復元口径14cmを測り、内外面に灰オリーブ色の釉がかかる。在地産のものである。18は徳利口縁部と思われる。黒褐色の釉がかかる。19は飯事道具のすり鉢である。外面には黄褐色の釉がかかる。20はすり鉢である。外面には黒褐色の釉がかかりすり目は細かい。

21は軒平瓦片である。

ＳＸ－２

22～25は肥前系染付である。22は広東碗である。外面に草花文を入れ、復元口径11.5cmを測る。23は筒碗である。外面に菊花文を入れ、復元口径7.4cmを測る。24は盃である。復元口径7.2cmを測る。25は碗蓋である。復元口径9.8cmを測る。

26～29は在地産陶器である。26は湯飲み、27は灯さん、28は行平蓋、29は両手土鍋である。26は灰オリーブ色、27は灰白色、28は内面に黄色の釉をかける。29は橙色釉をかける。

30は土人形である。力士か。

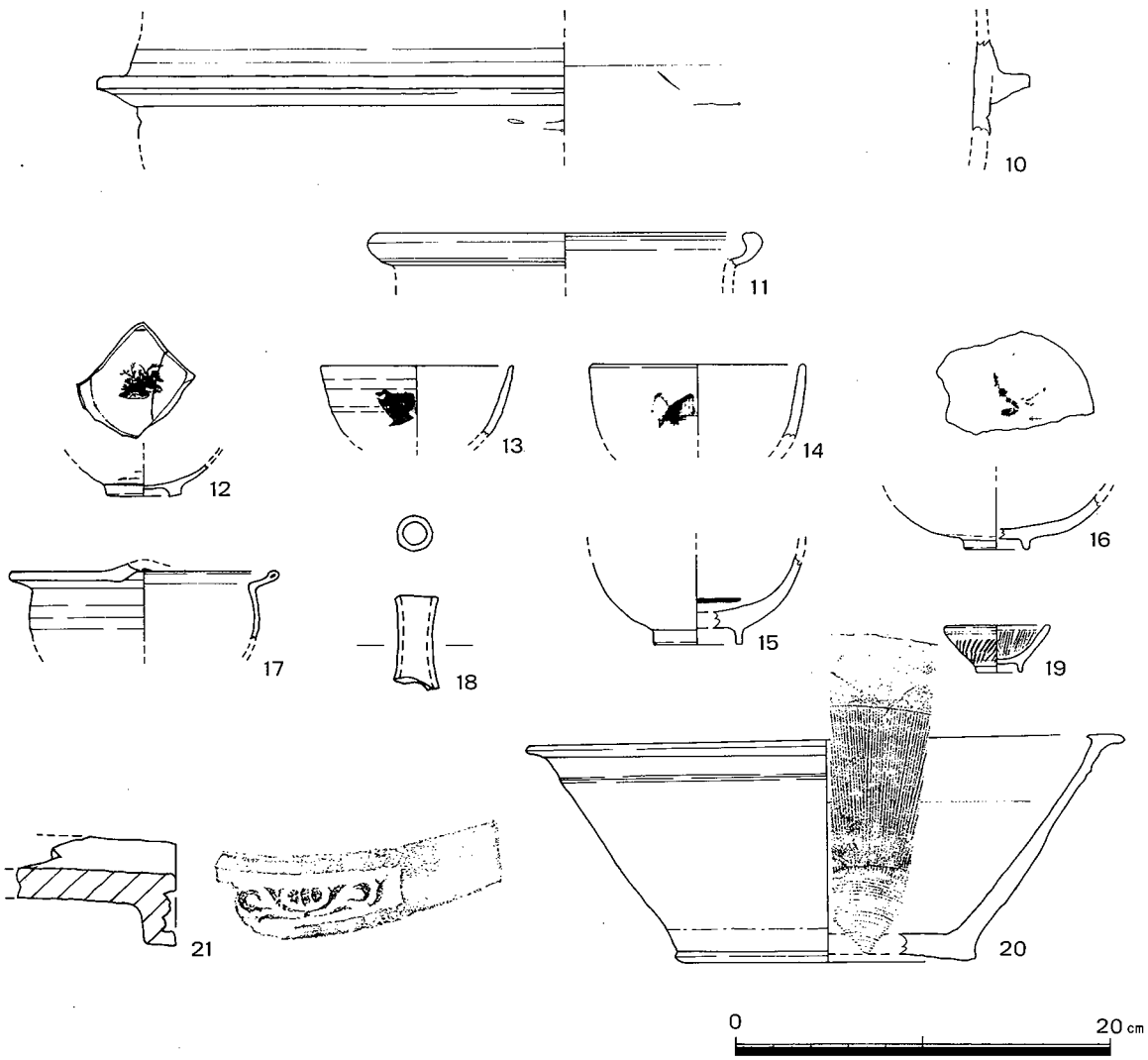


図６　ＳＫ－１、ＳＸ－１出土遺物

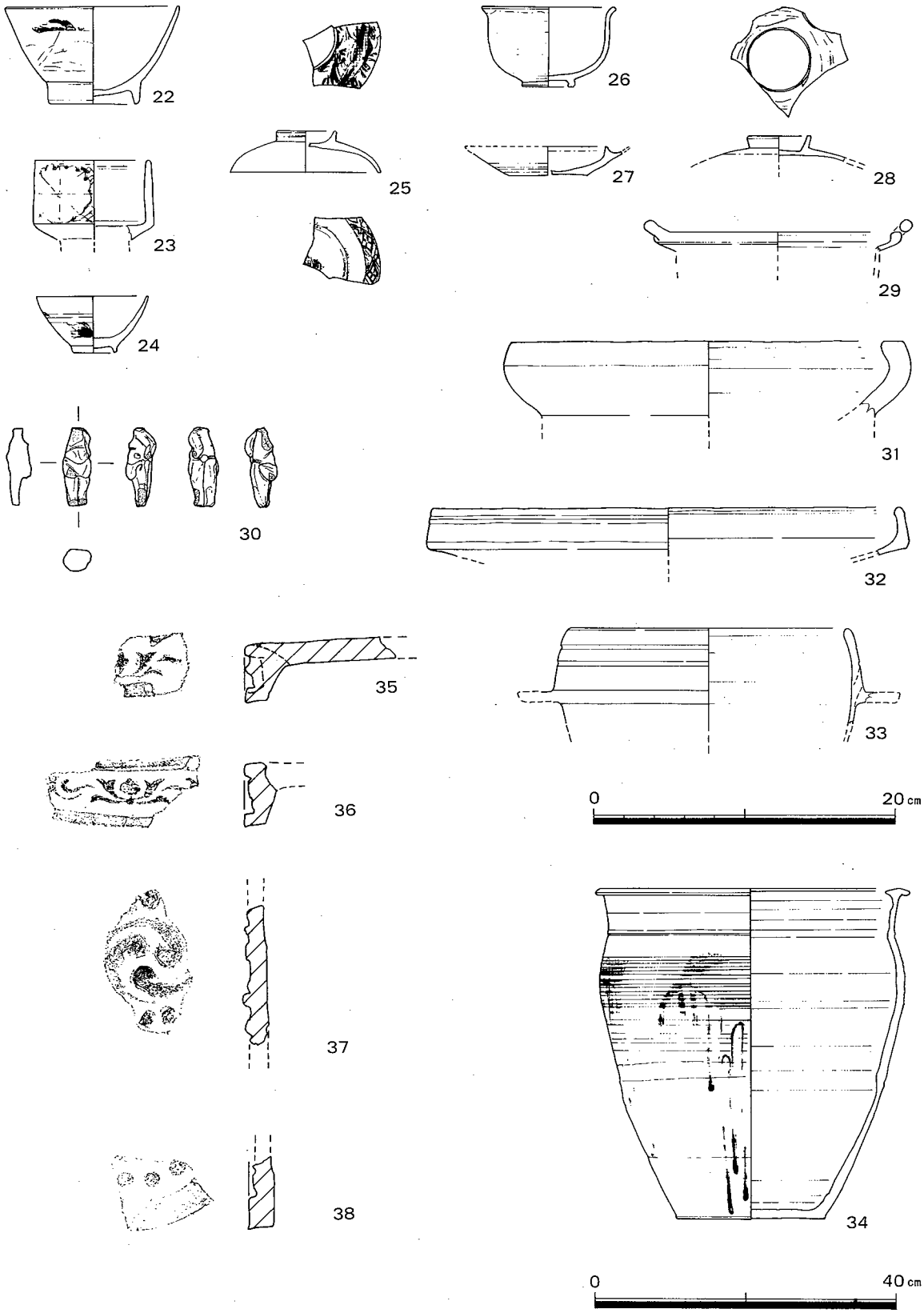


図7　SX－2出土遺物

31は土管と思われる。32は焙烙である。復元口径31cmを測る。33は瓦質羽釜である。外面には2条の沈線がめぐる。34は陶器甕である。

35、36は軒平瓦、37、38は軒丸瓦である。

5、まとめ

今回の調査は様々な制約の中でのものであったが、一応の成果は得られたものと思われる。

遺構については、最終面の調査には至っていないため、充分な成果が得られたとはいえないが幕末頃と思われる遺構を多数検出した。

検出した遺構すべてについて性格付けすることはできないが、調査区のほぼ中央では道の様に固く締った部分を確認し、さらに、その固い部分の両側に広がる遺構を確認しており、あたかも街路とその周辺を調査したような状況を呈している。

青山賢信氏の分析によると、街路は慶安元年の絵図以降、ほぼ踏襲しながら現在に至るとされている。今回の調査地の南東部に接する道路は、青山氏による慶安元年絵図照合図では存在せず、後に設置されたとしている。したがって、現道路成立以前は本調査内に街路が通っていたとすることも可能である。

しかし、その場合、願泉寺門前を通る街路とは直線的にはならず、食い違うこととなってしまうので、現時点では今回の検出例を街路とするには問題が残る。

限られた調査面積であるため、これ以上の推定は不可能であるが、今後の周辺調査における課題を得られたといえる。

次に、前章の貝塚寺内町遺跡の調査と対象的に、現地表から地山までの深さが浅く、遺物包含層が薄いことが挙げられる。

今回の調査地は段丘上に位置しており、海岸付近の砂堆部における調査に比べると遺物包含層の堆積が薄いことは予想されたが、本調査地は特に薄く、そのため同一面上に、幕末から近代までの遺構を重複して検出し、遺構の把握が非常に難しい状況である。

立地条件からすると、すでに一定の地形高を得ているため、盛土を行わず、切土整地を主体として造成を繰返した結果、現状に至ったと推定できる。

〔参考文献〕

貝塚市教育委員会『貝塚寺内町―町並調査報告書―』1987　図版7～10

Ⅲ　沢城跡の調査

1．位置と環境（図８）

発掘調査を実施したのは沢城跡の一角である。

沢城跡は、貝塚市をほぼ縦断する近木川と泉佐野市とに境界をなす見出川とに挟まれた段丘上、海抜約８ｍ～11ｍを測る地点に位置し、東西約400ｍ、南北約350ｍの範囲に広がる中世末頃の城跡である。

昭和60年以降、遺跡南西部における発掘調査が進み、11世紀から15世紀にかけての集落跡、耕作地について徐々に解明されつつある。しかし、城跡についての確実な調査例に乏しい状況が続いている。

周辺には、弥生時代前期末の溝等を検出した沢遺跡、平安時代の寺院跡と推定される明楽寺跡、中世集落を検出した澱池遺跡等が近接して存在し、弥生時代以降、人々の活発な活動が窺える地域である。また、市内において遺跡の集中する地域の一つである。

今回の調査地は遺跡マーク地の南西端に近く、貝塚市沢字サ吉696である。

2．調査の概要（図９）

建設計画にもとづき、調査対象地南西部分に２×７ｍの調査区を設定して発掘調査を実施した。

調査地における基本層序は、上から順に、黄色土（第１層、層厚約20㎝）、暗灰茶色土（第２

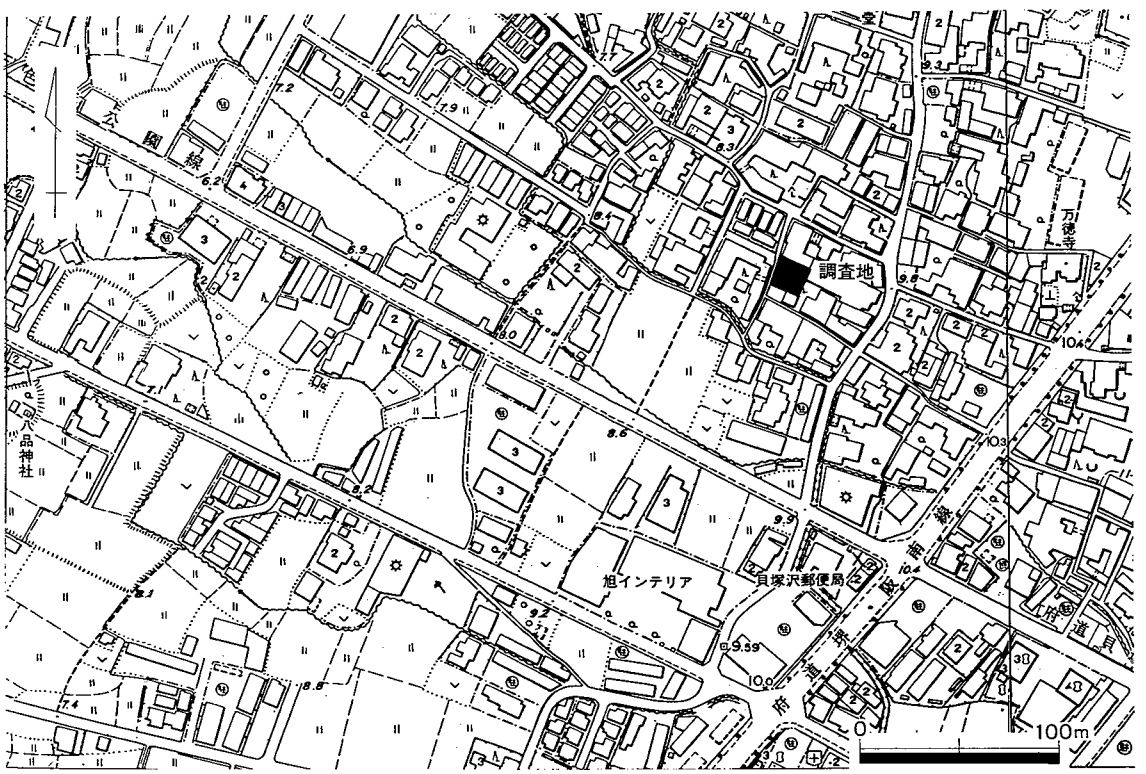


図８　調査地位置図

層、層厚約10㎝）が堆積し、その下に淡黄灰色粘土が存在する。第１層は既設建物にかかる現代土と見られ、第２層は近世末頃の耕作土と見られる。

遺構は淡黄灰色粘土上面にて検出した。

３．検出遺構（図９）

調査では溝１、鋤溝１、土坑１の３ヶ所の遺構を検出した。鋤溝、土坑は埋土が第２層であるため、耕作に伴う遺構と見られる。溝は大型のものである。

以下、溝について示す。

ＳＤ－１

本遺構は調査区西半にて検出した溝である。検出長1.5ｍ、検出幅４ｍ、深さ約35㎝を測る。埋土は２層に分かれ、上層が淡灰茶色シルト質土、下層が黄灰色粘土である。底部の比高については、北東～南西方向ではほぼフラットであるが、南東～北西方向では北西に向ってやや低くなっていく。水流の様子はなく、掘削後、短い期間で埋戻されたようである。北東端の法面下部に１ヶ所20㎝程度の石が存在し、石垣状になっていた可能性もある。遺物は各層に集中することなく分散して、瓦片、羽釜、すり鉢等が出土した。埋没時期は17世紀前半である。

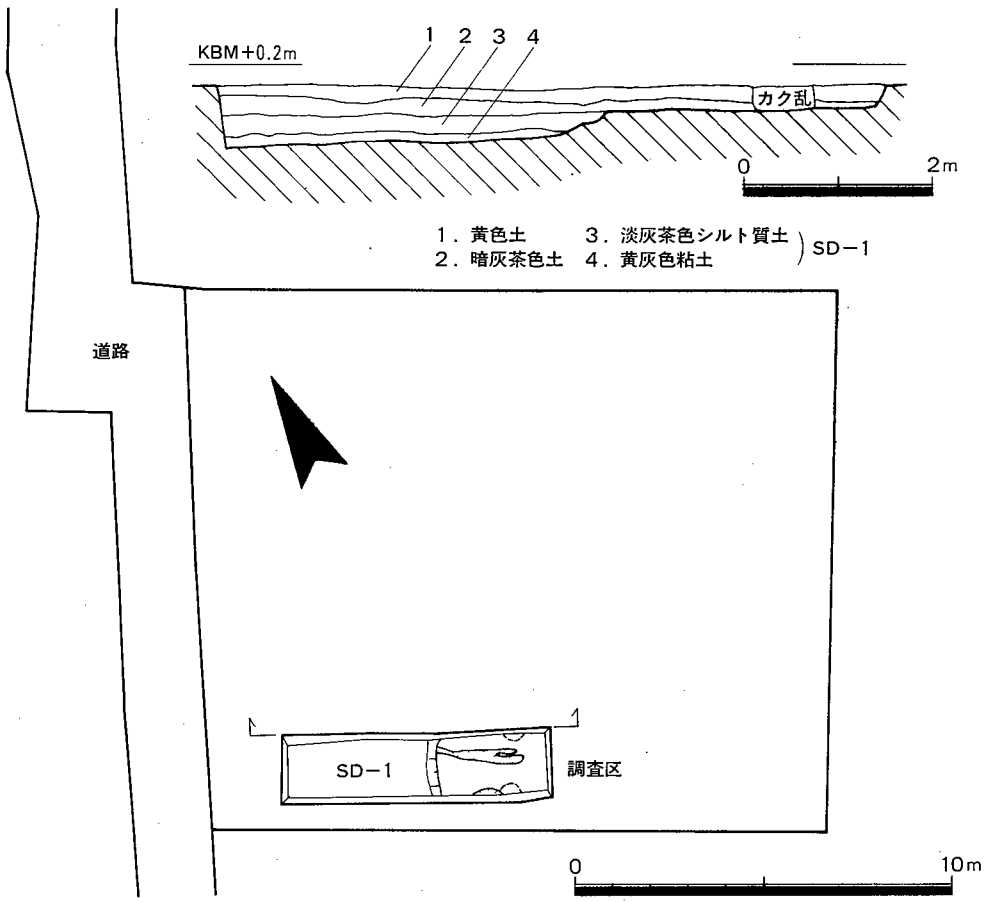


図９　調査区、遺構配置図

4．出土遺物（図10～12）

調査では瓦を中心として遺物が出土した。集中して出土した部分はなく、量的には多くない。以下、ＳＤ－１と第２層について、その概要を示す。

ＳＤ－１

39は土師質羽釜である。内面はハケメ様のもの、外面体部はケズリを施す。復元口径25.4㎝を測る。

40は土師質すり鉢である。内外面共に摩滅が激しく、調整不明。復元口径27.2㎝を測る。

41は陶器すり鉢である。外面底部は粗い横位ケズリを施すが、その上はナデのようである。小破片のため明確ではない。

42は青磁碗である。復元口径14㎝を測り、文様は認められない。

43は土師質甕である。内面は横位ハケ、外面はタタキ後ナデを施す。外面頸部には、板状のもので強くナデた痕跡を残す。復元口径72㎝を測る。

44、45は平瓦である。44は凹面には糸切り痕、布目痕が残り、凸面には縄目タタキを有す。45は凹面糸切り痕、凸面に縄目タタキ痕を有す。

46、47は丸瓦である。

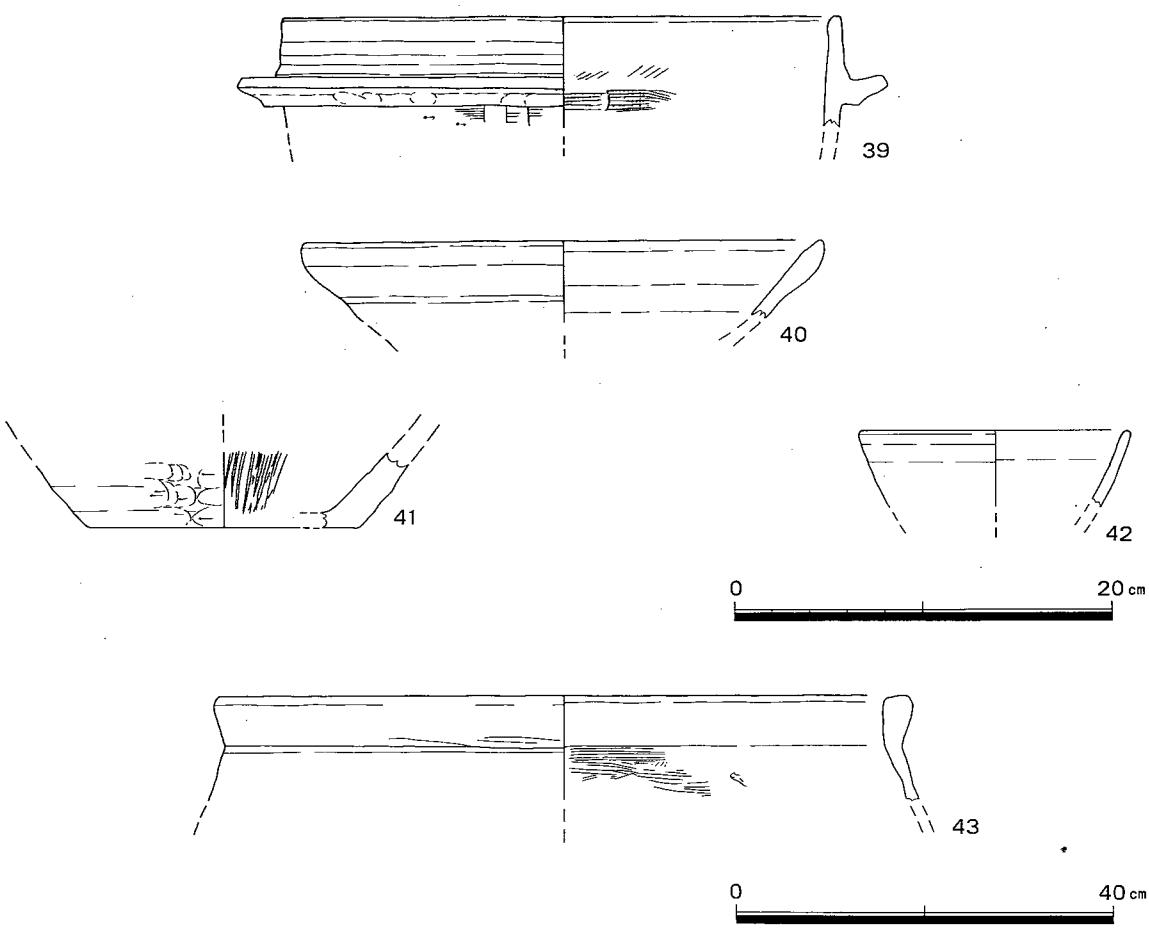


図10　SD－1出土遺物

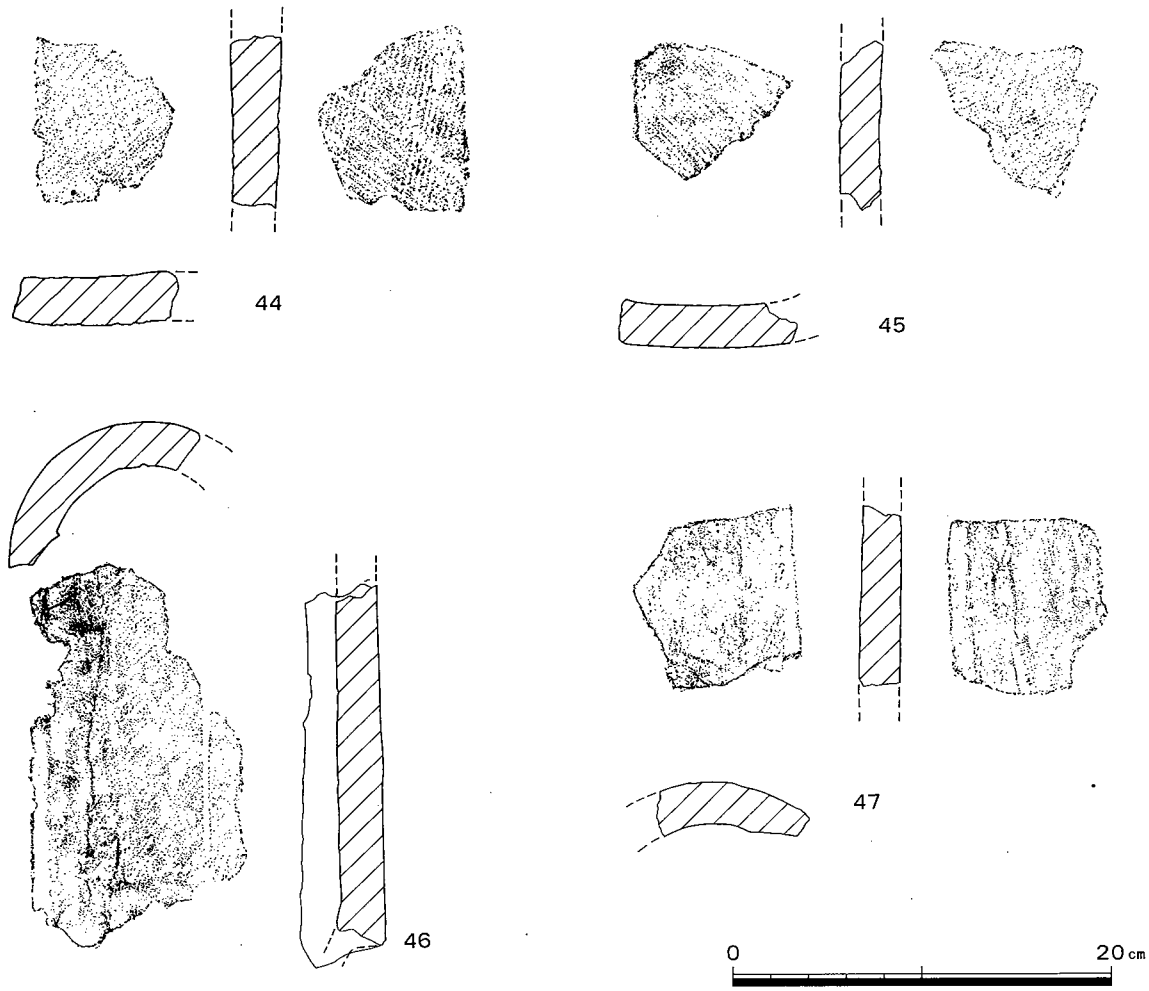


図11　SD－1出土遺物

第２層出土遺物

48は肥前系染付碗である。49は陶器碗である。白色の胎土を用い、灰白色の釉がかかる。50は在地産陶器土瓶である。灰白色の胎土に灰色の釉がかかる。

5．まとめ

今回の調査は限られた面積のものであったが、一応の成果は得られたと思われる。

調査地では、近世末頃と見られる遺物包含層が存在するのみであり、中世の遺物包含層は認められなかった。

調査地北側にて昭和60年に実施した調査では、14世紀末～15世紀前半の遺物包含層を良好な状態にて確認している[1)]。現状のレベル高ではほとんど比高がないため、本調査地が本来は高くなっ

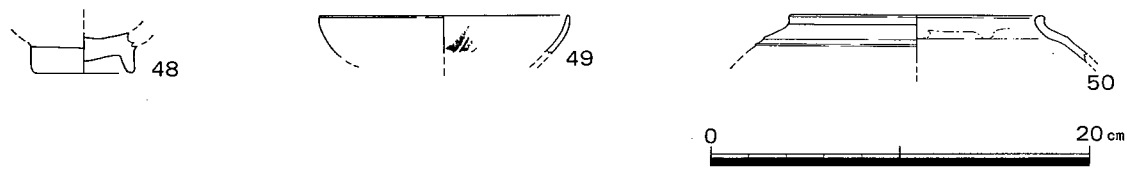


図12　第２層出土遺物

ており、江戸時代頃削平し農地としたものと推定できる。

沢地域は、遺物包含層の堆積が薄く、時代的な変遷については理解し難い場所であり、今回も他と同様な調査となった。

ＳＤ―１については、一方の法面のみの検出であり、遺物包含層である可能性を完全に否定できるものではない。しかし、検出した法面が２段状を呈しており、その角度が自然のものとは判断し難いものであり、溝である可能性は高い。溝の性格としては、沢城をめぐる堀の残存遺構と考えられる。

沢城については、絵図等を参考に、一応、本調査地周辺を遺跡としているが、正確な範囲については明確ではなかった。昭和56年に実施した宝蔵寺改築に伴う発掘調査において、ほぼ東西方向に流れる幅約４ｍを測る溝を検出しており、今回のＳＤ―１と近い規模をもっている[2)]。

これらの溝を単なる配水溝や農業用の溝とするには規模が大きすぎ、沢城の堀である可能性は高いものと思われる。堀であるならば、沢城の南東端と南西端を検出したこととなり、その意義は大きいものと思われる。

限られた調査面積であるため、これ以上の推定は不可能である。今後の周辺調査における課題としたい。

なお、地字名等から分析して、沢城跡を現在の遺跡マーク地より北東側に位置するという復元案が近藤孝敏氏によって提示されている[3)]。しかし、その地点は近木川氾濫原に位置しており、周辺の同じ氾濫原上における調査では、中世末頃に農地として利用され始め、以後、現在の宅地となる前までは農地であったことを確認している。したがって、先の北東側に位置するという地点は沢城跡である可能性は低いといえる。

〔参考文献〕

１）貝塚市教育委員会編『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅷ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第11集
1986　３Ｐ

２）貝塚市教育委員会編『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅳ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第５集
1982　９Ｐ

３）近藤孝敏「近木庄の歴史と在地の動向―その成立と展開を中心にして―」『ヒストリア第144号』大阪歴史学会　1994

報告書抄録

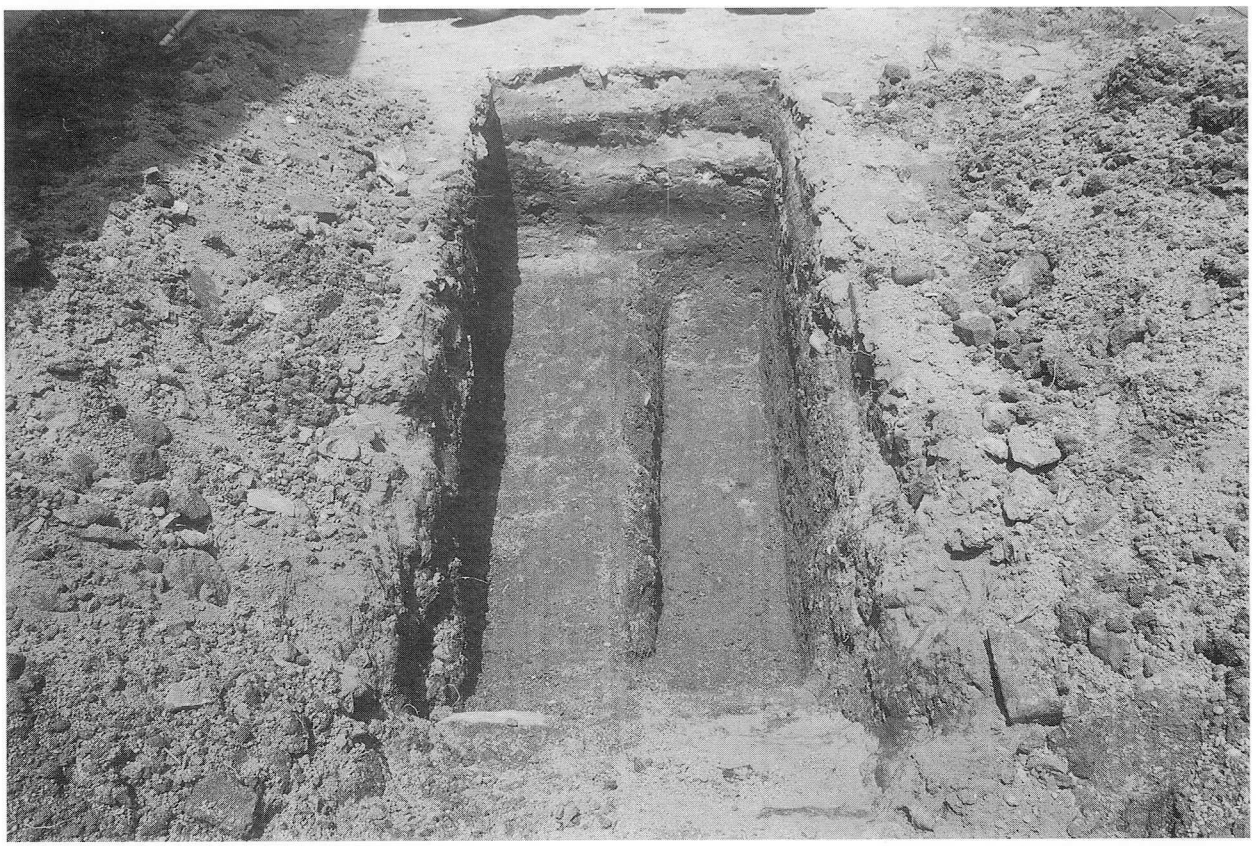
ふりがな	かいづかし いせきぐん はつくつちようさがいよう
書名	貝塚市遺跡群発掘調査概要
副書名	
巻次	１８
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第　３８　集
編著者名	前川　浩一
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597 大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号　TEL 0724(23)2151
発行年月日	西暦　１９９６年　３月　２９日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かいづかじないちよう 貝塚寺内町 い せき 遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 にしまち 西町	27208	22	34度 27分	135度 21分	19950725 19950726	１５	住宅建替
かいづかじなうちよう 貝塚寺内町 い せき 遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 きたまち 北町	27208	22	34度 27分	135度 21分	19950821 19950822	１６	住宅建替
さわじようあと 沢城跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 さわ 沢	27208	28	34度 26分	135度 20分	19950913 19950914	１１	住宅建替

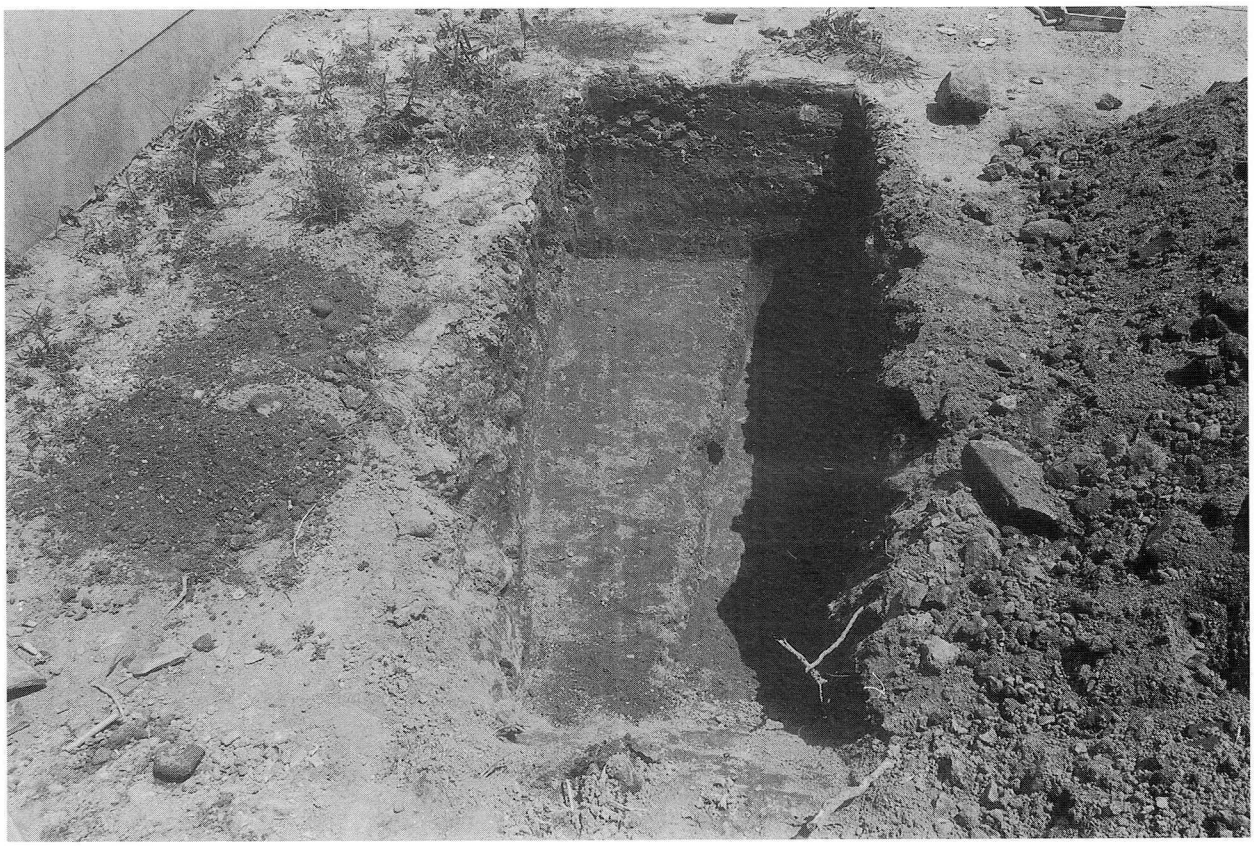
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かいづかじないちよう 貝塚寺内町 い せき 遺跡	城郭寺院	近世	なし	陶磁器、瓦	近世造成
かいづかじないちよう 貝塚寺内町 い せき 遺跡	城郭寺院	近世	土坑	陶磁器、瓦	近世宅地
さわじようあと 沢城跡	城跡	近世	鋤溝、土坑 堀	陶磁器、瓦	近世初頭遺構

図　　版

図版1　貝塚寺内町遺跡（Ⅰ）

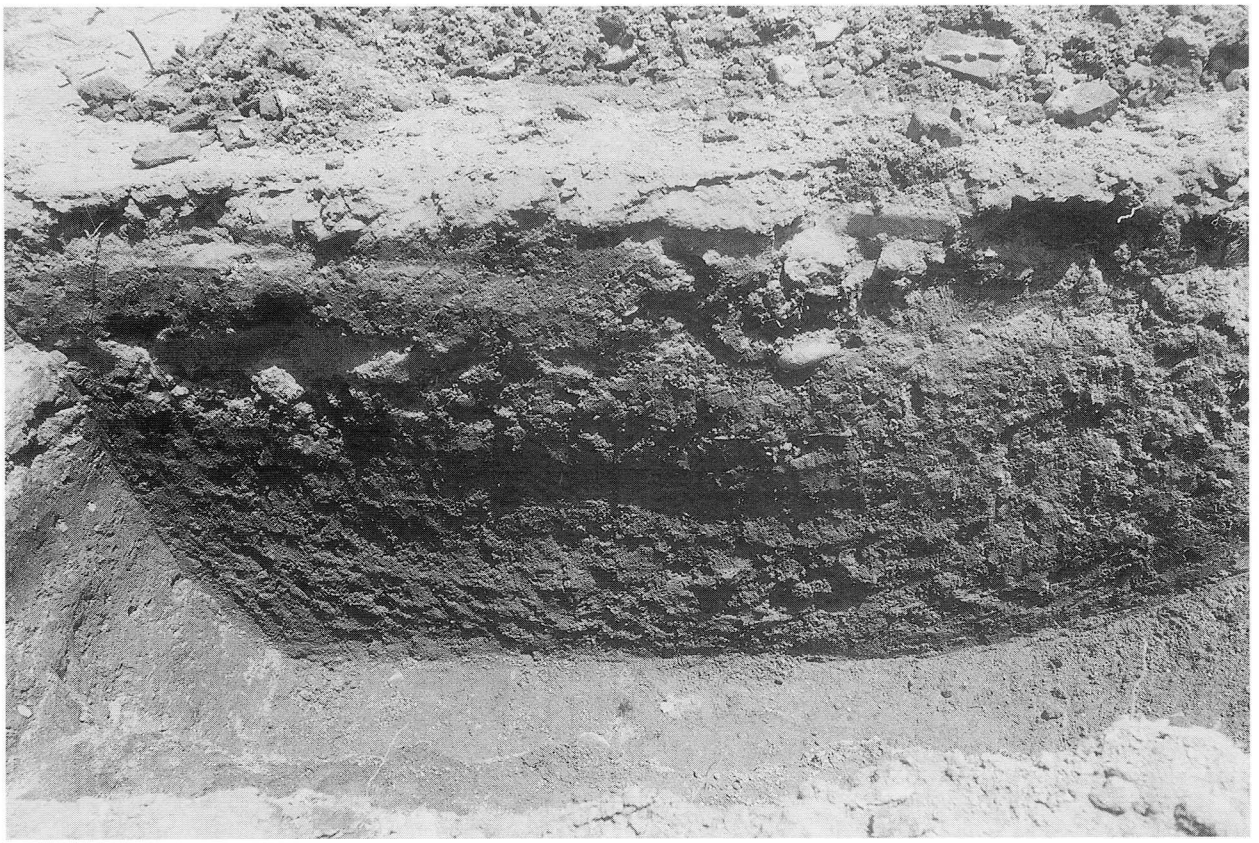


1．第1区全景　　南東より

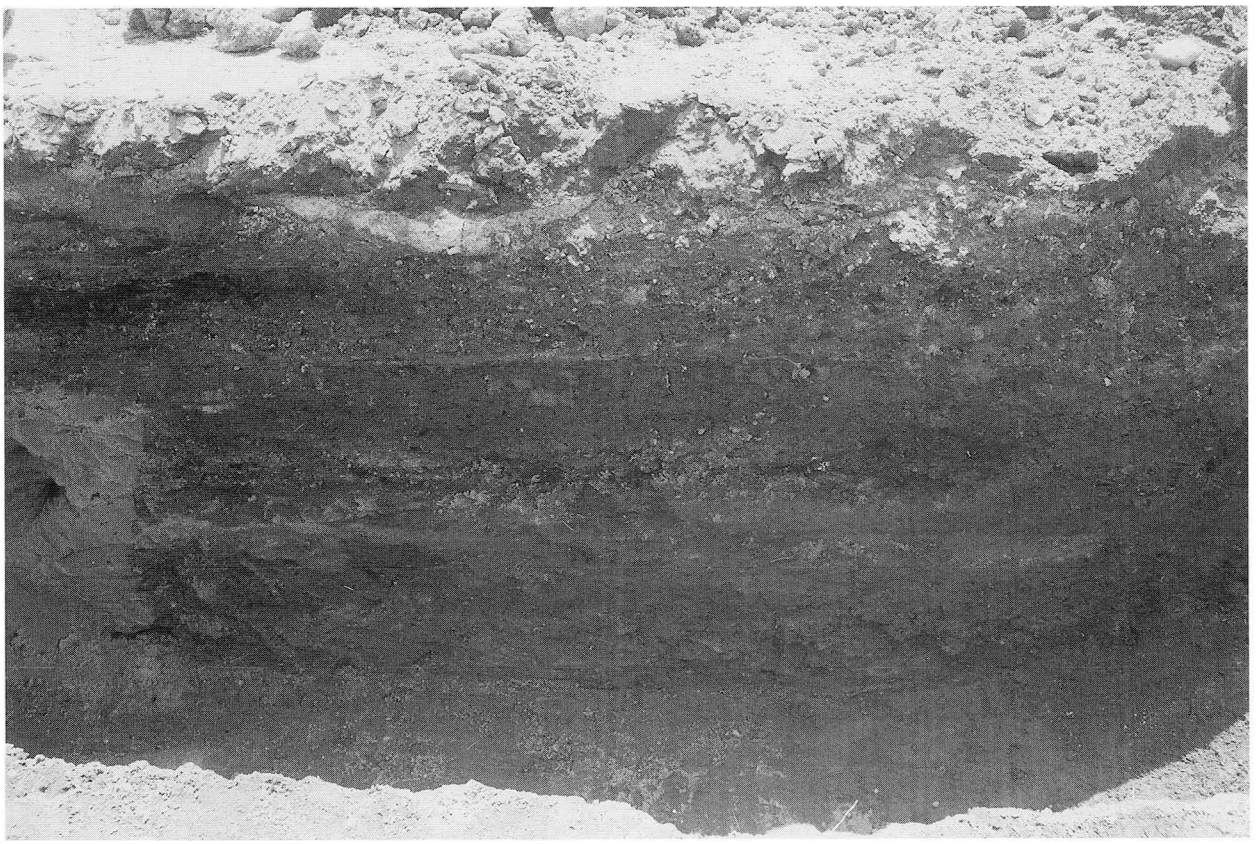


2．第2区全景　　北西より

図版2　貝塚寺内町遺跡（Ⅰ）

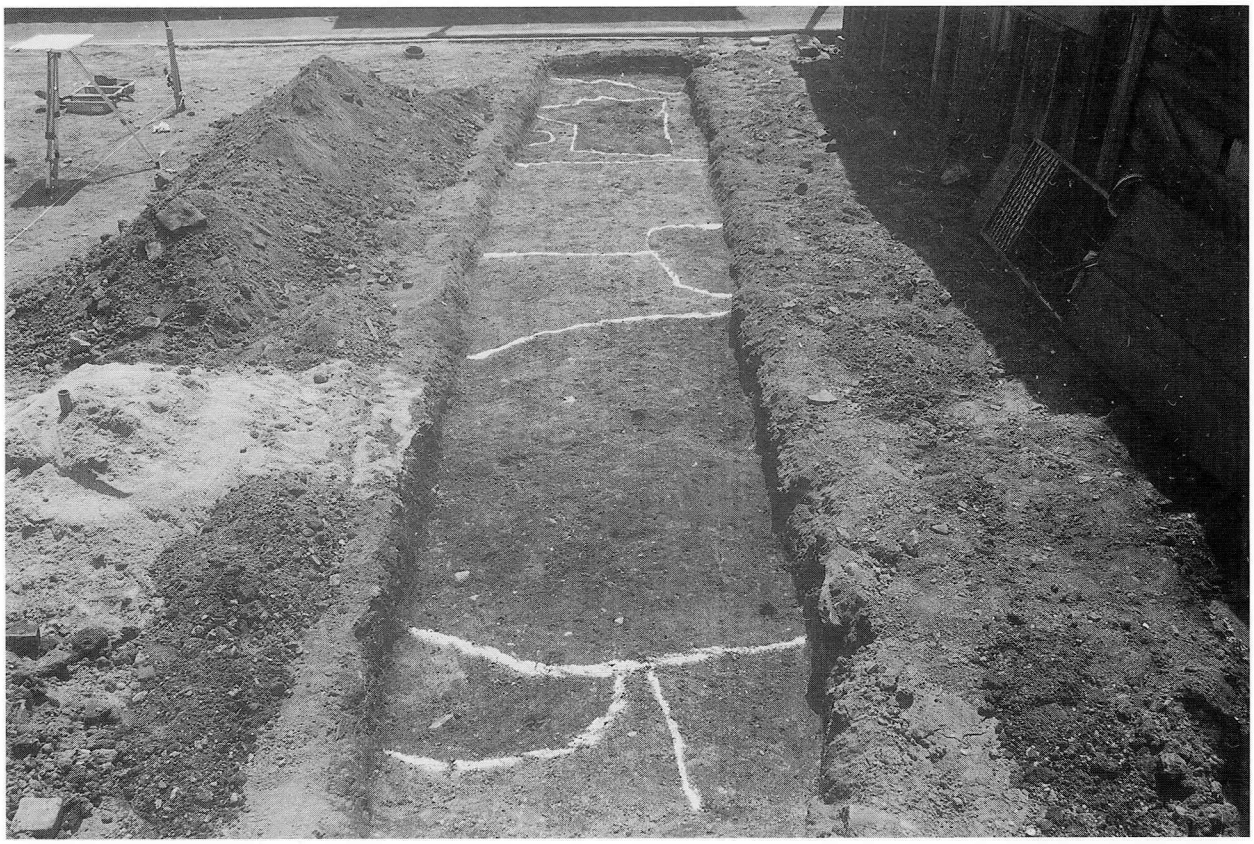


1．第1区土層断面　　南西より

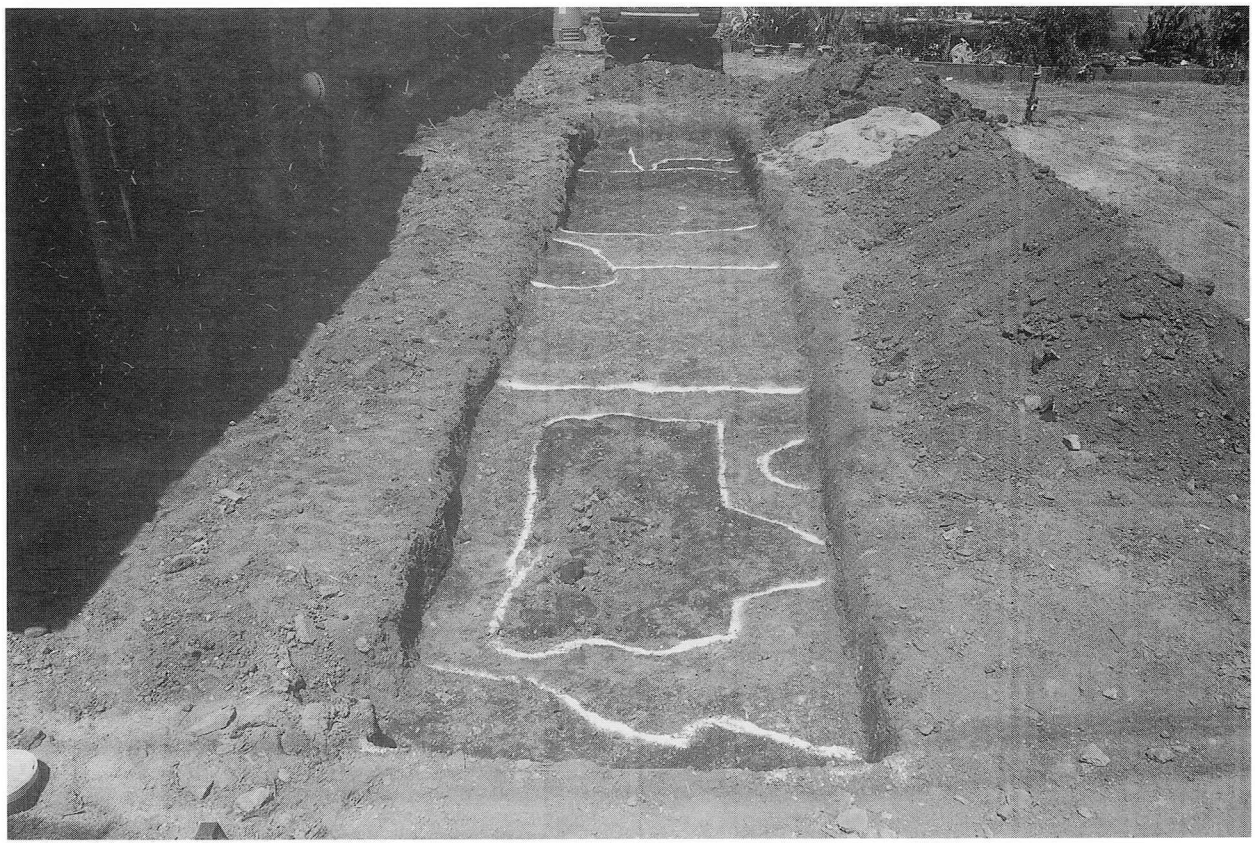


2．第2区土層断面　　北東より

図版3　貝塚寺内町遺跡（Ⅱ）



1．調査区全景　　北西より

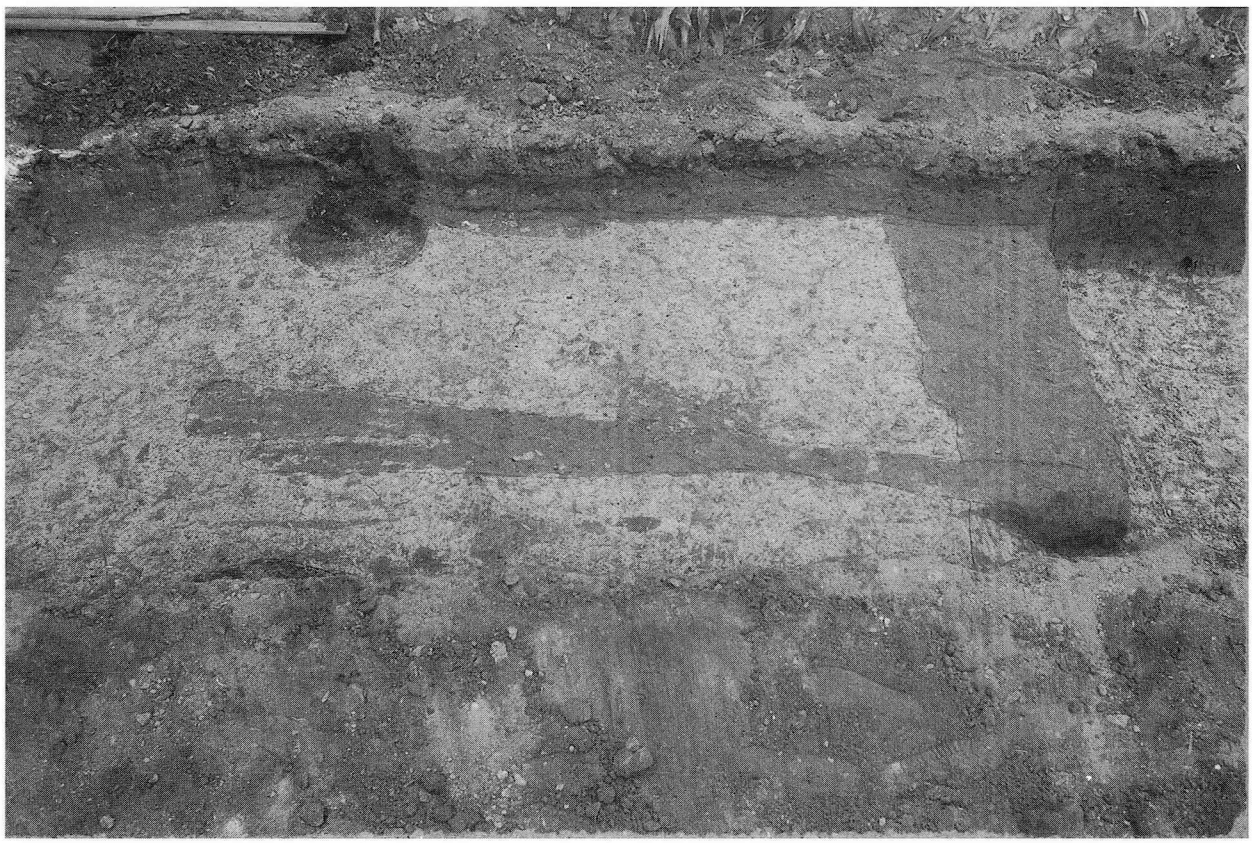


2．同　　上　　南東より

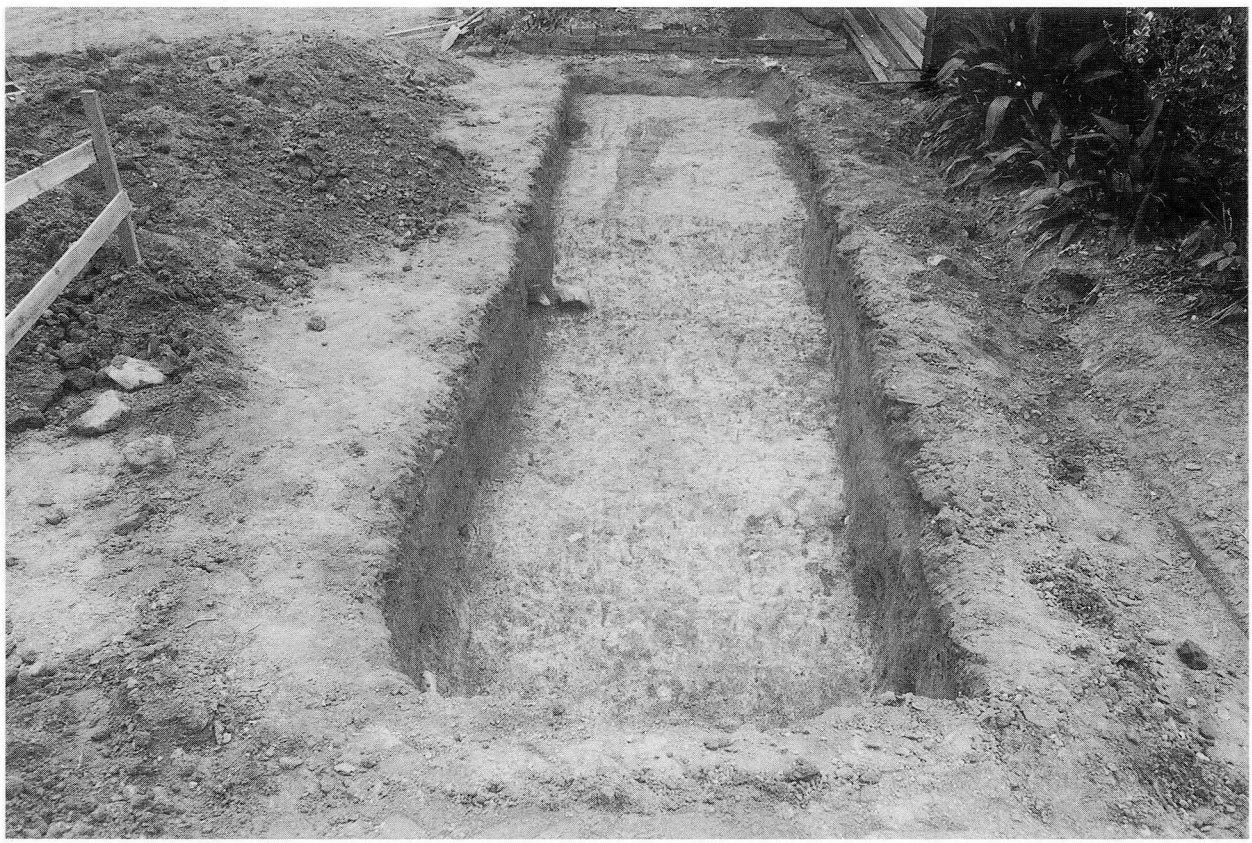
図版4　沢城跡

1．遺構検出状況　　北西より

2．同　　上　　南東より

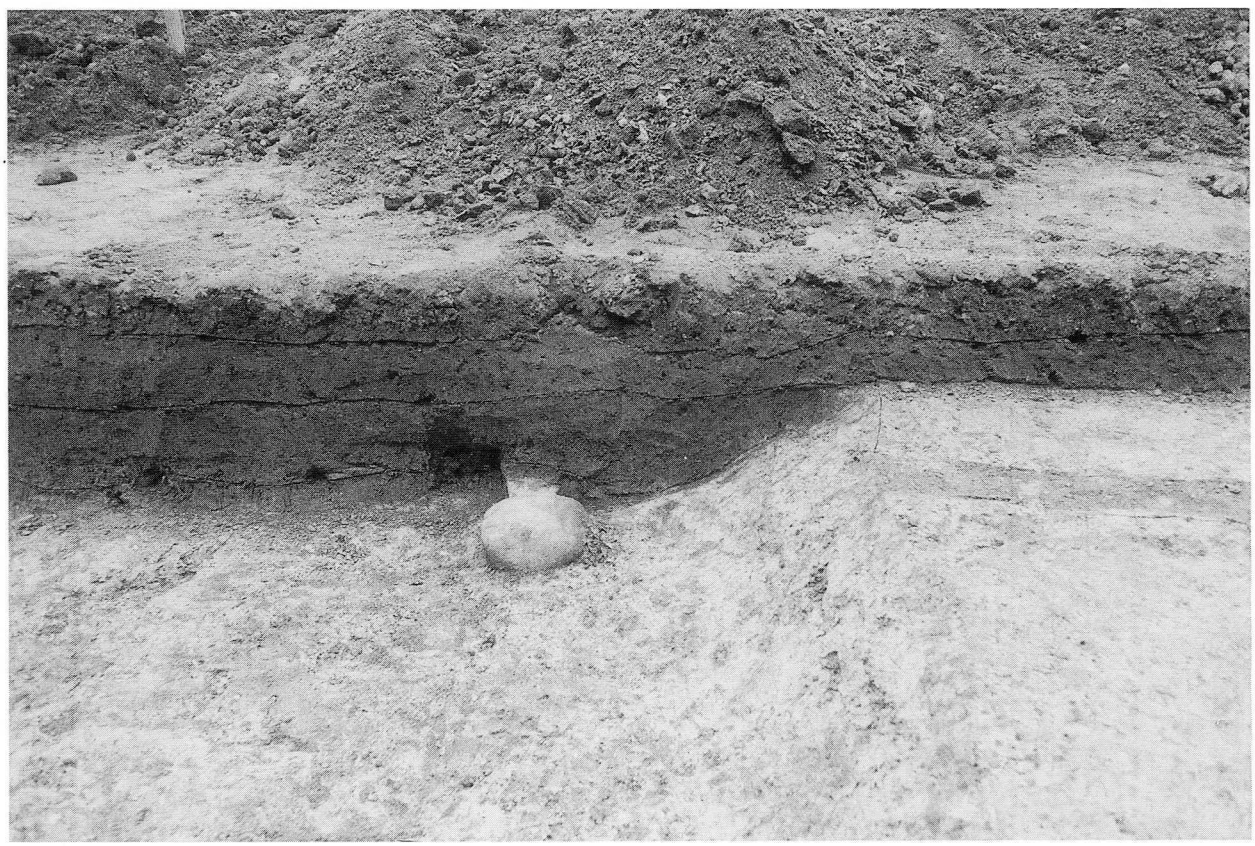


1．遺構検出状況　　北東より



2．調査区完掘状況　　北西より

1．調査区土層断面　　西より



2．ＳＤ－１土層断面　　南西より

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第38集

貝塚市遺跡群発掘調査概要18

発 行 日　平成8年3月29日
編集・発行　貝塚市教育委員会
　　貝塚市畠中1丁目17番1号
印　　刷　ライト印刷（貝塚市石才96—34）